

氏名	守谷 広子
ヨミガナ	モリヤ ヒロコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第514号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 ロラン・バルトの記号学的文学論と文学的活動としての講義 ——理論と実践の照応関係の確認——

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	松尾 大
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	川瀬 智之
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	布施 英利

（論文内容の要旨）

本論の目的は、ロラン・バルト（Roland Barthes, 1915–80）の文学論を、理論的考察と実践的活動の二つの観点から議論し、双方の照応関係を明らかにすることにある。通常、文学をめぐるバルトの思索は、時代に応じて以下の二つに類別される。一方は、バルトが執筆活動を開始した1940年代から60年代にかけての「批評の時代」である。この時代のバルトは、個々の文学作品の分析から出発して、記号学的知見を土台とした独自の文学理論を構築した。他方で、70年代以降のバルトは、自ら文学的テクストの執筆を試みるようになる。本論は、この二つの時代の照応関係を確認することで、バルトの文学論に指摘されてきた「理論」と「実践」の非一貫性を解消し、バルトの文学論がこの両側面をふまえた上で統一的に理解されるべきものであることを明らかにする。この作業を通じて、以下に挙げる二つの典型的なバルト解釈に修正を加えることが可能になる。

本論が修正を試みる第一の点は、バルトの著作に指摘される「非一貫性」や「断絶」を、そのままバルトの思想の本質とする見方である。従来のバルト研究においては、バルトの著作にみられる表現の齟齬の数々をふまえて、それらのテクストを「共通の分母をもたない」ものとして扱うことが一般的であった。これにたいして本論は、バルトの文学論が一貫して「実践」の観点からなされていたことを論証する。これによって、バルトの「理論的探究」と「実践的（方法的）探求」とのあいだに指摘されてきた見かけ上の隔離を解消することが可能になる。

本論の第二の目的は、実践的観点からバルトの思索を捉え直すことで、晩年にバルトが試みた「小説」と「講義」という二つの試みの関連性を闡明することにある。従来の研究においては、「小説を書くこと」と「講義をおこなうこと」との繋がりが十分に明らかにされないまま、バルトの「小説」を書く試みは、『恋愛のディスクール・断章』（1977）や『明るい部屋』（1980）といった晩年の主要な著作に結びつけられて論じられてきた。しかしながら、バルトの文学実践の目的は、既存の「小説」のジャンルに当てはまるような作品を完成させることではなく、文学的な「実践」そのものの中にあつた。それにも拘らず、バルトの「小説」を書く試みが「挫折」によって語られてきたのは、バルトの文学実践の目的が一義的にしか理解されてこなかったことを意味している。

以上のような既存のバルト解釈の修正を念頭に本論は、バルトの文学論に指摘されてきた表層的な「断絶」の数々を是正し、文学をめぐるバルトの試みを統一的に理解可能なものとして呈示する。本論は全二部・全八章から構成される。第一部では、40年代から60年代にかけての文学理論、第二部では、70年代以降の文学的活動を取り上げる。第一部では、バルトが提起した文学をめぐる諸概念を規定し、続く第二部では、それらがバルト自身の文学実践にどのように適用されているかを確認する。第一部・第一章では、初期の批評作品から、後の文学理論の萌芽的要素を読み解く。第二章では、バルトの文学理論における言語学的思潮の

役割を明らかにする。ここから得られる知見を土台にして、第三章では、バルトにおける「文学の形式」概念について検討し、第四章では、その具体例を呈示する。続く第二部・第五章では、バルトの文学的实践に先駆けたディスクールの模倣の試みを取り上げ、第六章では、「ロマネスク」概念の分析から、バルト的小説がいかなるものであるかを明らかにする。第七章では、バルトが文学的实践に関連づけておこなった、ブルーストとの「一体化」の試みについて検討し、最後に第八章では、エクリチュールとパロールの融合した形式とされる「講義」が、バルトの文学的活動の中でどのような位置づけを与えられるべきかを明らかにする。以上のような仕方バルトのテキストの成立ちを再構成することで、それらは首尾一貫した文学的企図として理解されるはずである。

(総合審査結果の要旨)

本論文の目的は、バルトの先行研究が彼の執筆活動に一貫性の欠如を見ていたのに対して、実は一貫性があることを証明することである。筆者が取り上げる非一貫性は二つある。一つは60年代までの文学「理論」と70年代以降の文学「実践」の間に従来のバルト研究が見ていた断絶である。もう一つは、70年代以降の文学実践内部において、「小説」を書く意志を表明したことと、実際に行ったのが「講義」であったということの間に従来のバルト研究が見ていた不整合である。

論文全体は二つの部分から成る。理論を取りあげる第一部と、実践を取りあげる第二部である。第一の非一貫性、つまり理論と実践の間のそれを否定するために、筆者は論文第一部でバルトの理論を提示し、その理論に実践が照応していることを論文第二部で示している。第二部はまた第二の非一貫性、つまり「小説」と「講義」の断絶を否定する役割も持つ。

第一部は四つの章に分かれる。「古典」概念を扱う第一章、バルトによる「形式」概念の構築に対する構造言語学の寄与を扱う第二章、「形式」、「空白」概念を扱う第三章、「文学の形式」の実例を提示する第四章である。

第一部第一章は、何かを省略することによって、その空白を埋めるために何かを付け加えることへと、つまり「書く行為」へと読者を促すものとして「古典」が規定されていることを、ジッドの『日記』における古典作家とジッドの対話に即して実証する。

第二章は、「形式」こそが文学の本質をなすというバルトの理論が形成される際に、決定的な役割を演じたものとして、ソシュール、ヤーコブソン、バンヴェニストの構造言語学を分析する。

第三章は、バルトがその構造言語学の洞察を踏まえることによって、文学の本質は「形式」であるという理論を構成したことを示す。読者に能動的な言語活動をさせる動機としての「空白」を作品に付与するものが形式であり、この形式の独創性こそが作品に求められるものであるという内実をこの理論が持つものであることを、筆者はテキストに即して着実に実証している。

第四章はそのような「文学の形式」の実例としてケロール、ロブ＝グリエ、カフカを選び、彼らが「文学の形式」を実現する技法を取り上げることによって、第三章までに提示されてきたバルト理論の説明性能を計測する。その手際はあざやかで、実作に対するバルト理論の適用をバルト自身に代わって行なう試みとして意義ある章となっている。

第二部も四つの章に分かれる。「ディスクール」概念を扱う第五章、「ロマネスク」概念を扱う第六章、「一体化」概念を扱う第七章、「講義」を取りあげる第八章である。

第五章は、バルトが「コノテーションの次元」「二次的なコード」を生み出すものとして「ディスクール」を規定することによって、従来文学とは見られていなかったものが文学と見られることを確保し、それにかなう実践としてみずから『恋愛のディスクール・断章』を書いたことを示す。

次いで第六章は、従来は文学と見られていなかったディスクールの特徴として「ロマネスク」概念を提示する。それは統一的な「小説」とは異なる「小説の破片」であり、それによって既存の文学形式ではない、新たな形式に道が開かれたことを筆者は示す。

第七章では、バルトがブルーストとの「一体化」を試みたことを取りあげ、この一体化が、第一部で論じられた古典との対話によって読者が書くよう促されるということと解されることによって、彼の目指す文学

実践とそれまでの理論との紐帯が示される。そして、この一体化による「バルト的小説」の機能として「愛する人々を語ること」、「ある感情の領域を十分に、しかし間接的に再現すること」、「他者」（「読者」）に圧力を加えないものであること」を挙げ、次章との接続を確保する。

第八章は、先行する諸章で提示されてきた「バルト的小説」の三機能を果たす文学活動としてバルトの講義を解釈する。つまり、自らの講義を「新たな形式」の文学的実践の具現化と見なすことによって、それが「小説」と同じ企てであるとバルトは考えていたという見解を提示する。

本論文には確かに問題がないわけではない。第一部と第二部にそれぞれ理論と実践の論述を割り振るといふ構成の説明は、それ自体としては単純でわかりやすい。しかし第一部が理論だけを提示する点はよいとして、第二部は実際には理論と実践とを共に提示している。つまり第二部で叙述されるバルトの「新たな形式」の文学実践を説明するには、第一部で提示された理論だけでは不十分で、第二部で初めて提示される理論も必要となるのである。特にバルトによるジャンルの改変という実践は、第二部で提示される「ディスクール」「ロマネスク」「一体化」の概念をまっぴらで初めて十分に説明可能となる。従って、多少複雑になるにしても、実際の論述に整合した構成の説明が望ましかった。しかしこれは論文全体から見れば玉の小さなきずすぎない。

論文の成果としては、領域的にもバルトの理論、実践双方にわたり、時代的にもバルトの活動の全域にわたる大きなスパンで統一的バルト像を描き切ったことが、最大のものであろう。これはバルト研究として高く評価できる。論文から引き出しうる帰結としては、バルトにおける理論と実践の照応関係の提示は、理論の適用として実践を、実践の構造化として理論を見ることに他ならないから、理論、実践それぞれのこれまで見えなかった位相を照らし出すことを可能にした点が挙げられる。これは今後のバルト研究にとって範例となろう。論文のオリジナリティーについて言えば、従来の研究が非一貫性、断絶を見ていたところに一貫性を見出す論証に成功しているから、その点でも申し分のない出来である。

以上、文学をめぐるバルトの理論的、実践的活動をその総体において説得的かつ明解に描き出したものとして、高い価値を持つ論文である。したがって博士学位を認定する十分な根拠となる。